

生きねばならぬと言ふ者に

「愛の信仰のと言う前に私は生きねばなりません。」……

「私の願ひをつきつめたら、結局生きねばならぬということでした。」……

「論より証拠、人たをござらんさい。生きるためにのみ働いているではありませんか。」

そう言いなさるのも無理はない。私はこの問題に対して答える前に、ほんとに真剣な態度で人生を見つめる者の是非行きあたりねばならぬ問題として尊い同情を捧げます。

生きねばならぬ。何というはつきりした、そして力強い悲痛な声でしょう。

大地の上に両足をふみはつて、目を地上にそそぐ時、生きねばならぬという悲痛な願ひが噴水のように湧きあげて来ます。けれど私たちは、もう一度深く考えをめぐらさなければなりません。

いったい生きんとして生きる者に、生き得なかつたものがありますか。そして又、生き通されたものがあつたでしょうか。言いかえると、生きたくないと言つても生きねばならぬ。生きたいと言つても死なねばならぬ。それが生きるということの意義ではないか。

だとすればただ生きねばならぬということは問題ではないのです。その上に、
「如何に」

そうです、「如何に生きるか」、それがほんとの問題ではないのでしょうか。

眞実に生きねばならぬ。

美しく生きねばならぬ。

尊く生きねばならぬ。

豊かに生きねばならぬ。

生きねばならぬだけならどんなに人生は怠けたものになるでしょう。

生きねばならぬだけなら、私は私の母が餓死しそうな時すらほっておきます。私は生きていくからです。けれど、餓死する母を見ていられないで、私の汗をもつて得た食物を半ばわけてあたえるのは、「愛に」生きねばおれぬ私の心があるからではありませんか。人生の妙味はここから湧くものではありませんまいか。

人の貧しさも、ただ貧しさのみなら苦痛ではないのだ。貧しさと愛とからまるところに孝子生れ、貞婦出で、忠僕を奮起さすのである。

豊かに生きたい。それが人間の最初の問題であつた。美しい家に、美しい衣服をつけて、美味しい食物を食べて生きたい。そしてそれが今まで大部分の人間の働く根本問題である。この問題も、最初は生きたいことが中心で、物質はその家来であつた。けれど人間は長い間に、魂を物質の家来にしてしまった。

物を得んために五十年を費やして、何も持たないで墓場に行った。

見よ。現在世界あげて風靡せんとする社会主義的思想は、世界の富を如何に個人に分つべきかということにすぎぬではないか。けれどもつと深く考えた時、無限の欲望をもつ人間の生活に、ある一定の物質財産をもたせただけで有難いと満足するだろうか。美しい西洋館に、食うに山海の珍味をもつてさせたら、もう問題はおこらぬだろうか。

覚めたる魂はそれだけではきかぬ。

人間の魂はそれではきかぬ。

もしゆたらかに暮せばいいだけなら、それだけなら、私は如何にしても、どんなむごたらしい目に他人をあわしても富を積む。勉強もいらぬ。道もいらぬ。金色夜叉となつて生きる。けれども世界が生んだ最も覚つた人たちは、財産すら破れ草履の如く棄ててしまった。

私たちはもつと深く求めねばならぬ。人間の魂が若々しいだけ、善を好んで悪をいとう。

真実に生きたい。善人として生きたい。この願いのない人間はあるまい。より真実の世界に、より清い生活にと、どんなに消そうとしてもかき消すことは出来ぬ。

真実に生きるためには好んで貧しくさえ暮した。否、真実へのためには生きねばならぬ生命さえ棄ててかかった。人類の長い歴史はそうした真実への生き方についての問題で追うて来たのだ。かく複雑になつて来た時、生きねばならぬという問題は、「如何に真実に生きるか。」という問題にかわつて来た。

私はむつかしい認識論的議論を省いて、私の達した結論に進みます。

「私たちは愛に生きねばならぬ。」

それはキリスト、釈迦、孔子、その他の聖者がこの地上から消えない限り、私たちに必然に残された真理であります。そして私の心の衷心の願いをつきつめた時、明かに達し得る断案であります。

最後に残る問題は、私たちはこの切なる願いをいだきながら、世界人類、禽獸草木、国土、一切をわが子の如く愛し得ざる悲しみであります。何故に「三界は我が子なり」というように愛し得ないか。

そうして又、私たちはこの切なる願いを抱きながら、何故に間もない内に死なねばならぬか。

この二つの問題に答えるには人間の智慧はあまりに小さいのであります。死がある以上、問題は未解決のまま残ります。私たちは、現世ばかりでは一切の問題に指一本ふれることは出来なくなりました。

何故に悪人でも栄えるか。

何故に、聖者さえ血を流さねばならぬか。

何故に、善を求める心があり、愛せんとする切ない念願に生ききれぬか。

何故に、地上ではものの生命をとらねば生きられぬか。

何故に、男女の欲があるか、醜交によつて生れねばならぬか。

死後の私たちはどうなるか。

この切ない願いを完成することは出来ぬか。

まだまだたくさん問題がある。そうしたこと解決がなければ、生きていることの出来ぬもの、如何に生きねばならぬかの最後の解決のなくてはならぬものには、ここに新しい無限の世界が与えられる。これが即ち、光明の世界である。一人の衆生の信仰はかうして生れる。若き真面目なる真剣なこの問いを出された青年に、この一篇を送つて、深い世界へ入つて永遠の自分を見出されることを念じてペンをおきます。

悪魔よ去れ

朝起きて、夜眠るまで、私たちは何かしています。

話す。食う。働く。読む。書く。思う。

楽しい、美しい、真実な思いで暮せるか。

気持ちよく働けるか。

温かい心で語れるか。

今日も何か読んだか。

おいしく今日も食物がいただけたか。

生きている間、毎日々々何かする。そのすることの内、その根底に感謝があつて、有難い心で、食い、働き、読み、眠ることの出来た日だけが、真実に生きた甲斐のある日である。

人間は何かする。然り。何かする。けれど、それがもしその踏み出しにおいて、間違つた考え、土台の定らぬ計画、我執我欲が根本であつたなら、したことは全部しなみに増している。

長い間の早魘が続く。そこにもここにも田植が出来ぬ。悪魔がつけこむ。見苦しい水喧嘩がおきて一つの組内でも敵になる。他家の飲水まで落して田にあてる。半自分の田に、半分他人の田にあてればよいのに、夜のまに行つて前日の仇討に、全部落して我が田にあてる。どちらにも言分はあろう。私が見たら同じこと、悪い者が二人よればこそ喧嘩になる。

重ねて言う。

悪い者が二人よればこそ喧嘩になる。有難い心なんか葉にしたくもない。

お天道様は、お前が生きるには、適普なだけ三度の食事は与えて下さる。食つて死んだ者こそあれ。食われないで死んだ者が、大正の今日どこにある。田が一枚二枚乾いたとて、死ぬ気づかいはほつてもない。水が無ければほつておけ。欲なおやじが水なみなみとあてていて、あなたの田に水をくれない？ それがどうした。そんなにして作つた米、否財産が末通ると思うのか。それではあまりに自信がない。もつと腹を据えたらどうだ。天の道に曇りは無い。したことの報いが一代に來ねば、子の代に、孫の代にはきつと来る。いえいえ、果報がありやこそ、そんな人でなしの、因果な者も生れて来る。雨は降つても喧嘩は残る。水は出来ても喧嘩は残る。我田引水を土

台にして、議論したとて何が出来る。幸福な心がどこから湧く。集つては相談、よつては話し合い。相手の悪口を肴にして酒飲むその座には、大小の悪魔が横手を打つて万歳となへているのに気づかぬか。水喧嘩がもとでしたことなら、千里行つても、寝ずの御精も、流れるような御議論も、一切がつかない、一文の値もない御苦労だと御承知なさい。

こんな水喧嘩こそ、十年に一度もないであろう。けれど、形の変つた水喧嘩なら、一家の内にもある。そこら中に行われる形のちがつた水喧嘩。悪魔の笑いが満ちるだけ、人間の歡喜が減つて来る。

一人の貧しい農夫がある朝早く耕しに出かけた。彼が空腹くなつた時、用意して来たパンを上衣の中に取りに行つた。上衣はあつたがパンがない。

「誰がおれのパンを盗んだのだろう。」

農夫のパンを盗んだ者は、一匹の小鬼であつた。小鬼は茂みにかくれて、様子を見ておつた。朝飯を失つた農夫は困つてしまつた。けれど彼は「仕方がない。……何にしてもおれは餓死はしないだろう。パンを取つた人は誰であつても何れもパンの欲しい奴だつたのだ。おいしく食つてくれればいいさ。」

そう言つて彼は水を飲んで仕事をした。小鬼は農夫に罪を犯させることが出来なかつたので、親分の悪魔のところに報告に行つた。悪魔の親分にその話をする、大變怒つて、「その百姓が勝つたのはお前のやりかたが悪いからだ。百姓たち、そしてその家内までが、そんな真似をしだしたら、おれらの仕事を全くなくしてしまう。そのまましておけぬ。もう一度行つて来い。もし三年の間にうまくやり直して勝つて来なければ、お前を聖水の中で泳がせてやるぞー」

小鬼は地上におりて来るとすぐ、働く男に化けた。そして先の貧しい男のところを使われることにした。

第一の年に、小鬼の下男は百姓に穀物を沼地に播くことを勧めた。その年は、非常な早であつたので、他の百姓たちの皆、萎れたけれど、貧しい百姓のだけは、よく成長して大變な収穫があつた。

第二の年に、小鬼は丘地に播種することを勧めた。その年は雨の多い年であつたから、他の百姓のは駄目だつたけれど、その農夫のは丘であつたから大變上出来で、彼は大變な穀物を余した。

そこで小鬼は、どうしたら穀物から酒を作ることが出来るかを教えた。農夫は強い酒を造つて、自分で飲んだり、彼の友達に与えたりした。

小鬼は親分の悪魔のところへかえつて行つて、失敗を取りかえしたことを言つた。親分は小鬼をつれて實際を見に出かけた。

農夫はその時、友人たちを集めて、酒を飲ませていた。ちょうど悪魔が来た時、農夫の妻は酒をついでいたが、卓子につきあたつて、コップに一ぱいの酒をこぼしてしまつた。農夫は怒つて大變に妻を叱つた。「何するんだい。貴様は溝の水だと思つてゐるのか。まぬけめ！ そんな上等酒を、床にまいて歩くやつがあるか。」

小鬼は親分に言つた。

「ごらん下さい。あれがとりがえのないパンを取られても、おいしく食ってくればよいがと言つて怒らなかつた男ですぞ。」

農夫は妻を口ぎたなく罵りながら、自分で酒をついでまわつた。

その時一人の貧しい農夫が仕事から帰路にこの農夫の家の前を通りかけ、呼ばれないのに入つて来た。仕事に疲れているので、彼も一滴飲みたいと思つて座つていた。けれど農夫は、「おれはどいつでもやつて来るやつにみんな、飲ませる酒は持たぬ。」と言つた。

悪魔たちは大変喜んだ。

彼等は酒につれて嘘だらけの滑らかな話をはじめた。彼等は狐のような性をあらわした。更に酒がまわつてくると、酔いつぶれて豚のようになった。

小鬼は悪魔にほめられて前の失敗をゆるされ、高い名誉な役目になった。(トルストイ 小鬼とパン切れの梗概)

人間の傲慢と、貪欲と、感謝を忘れた者にとりつく無数の悪魔。

悪魔よ去れ！ 悪魔よ去れ。

早が続けば悪魔がつけこむ。仕事が無ければ悪魔が心の主となる。貧しき者にも富める者にも、善人にも悪人にも、油断すれば悪魔がつけこむ。悪魔の声はやさしい。皆怠けるのに、君一人が働かなくてもいいじゃないか。皆、こんなに打砕けているのに、そう固くなるなよ。飲んで歌つて面白おかしく暮してこそ有難い人生だ。修養の何のと固くならなくても、悪魔に一寸誘われると、ぐんにやり腰のぬけた人間になる。

5

悪かつたとあやまる馬鹿がどこにおるか。口で胡魔化せ。やれるまで胡魔化せ。これでもまだ腹が立たぬか。そうじゃ、そこでうんと理が非でも、腹に入るまでやりつけてやれ。

あなたちよいと。ここはお金の使い場所ですよ。酒に御馳走に女に歌に、金さえ出せば日那／＼とてますよ。内の御家内さんには、浴衣一枚すら買わないようになさつても、そうそうポチはうん十円、毎度どうも有難う。横むいて舌をペロリと出して差し上げます。

お前は勉強しようとして都会に出た。だが時には命の洗濯も必要だ。英語の幾何のとそんな固いものよりも、ちよつとこちらに足一步入れてごらん。酒。借金。万引。不良少年……。

世の中のいわゆる実業家諸君。神商諸君。壮大な邸宅。華美な別荘。その他に獣の真似をなさるための妾宅。あちらこちらと乗り回しなさる自動車。なかなか中の広い御生活。悪魔の巢だとお気づきはないのか。何千円とかお同行の汗を集めての御堂班、白衣の金紋の御袈裟、庫裡では布施や謝礼の算盤とつて、悪人正機の利剣を揮い、造り念仏声色入りのお説教、それで草鞋の聖人のみあとが行けましようか。

たつた一つのお目あてが月給のあがること。三人寄れば月給の話。それでは教育は金儲けのためか。上らねば猶のこと教育大事と勉強なさい。それでも月給はあがらぬかも知れぬ。けれどそこには外の世界に安住出来る門口がある。
一々あげる暇がない。

一生涯死ぬるまで、悪魔は死ぬまでおしよせる。
腹立った心を静め、曇った智慧をもう一度よびさまし、厳粛に、良心にもつと權威をもたせようではないか。

悪魔にはとりつかれやすい。けれどそれは悪魔を降参させることが困難なと言うよりも、私自身があまりに弱いのだ。そうだ、あまりに弱いのだ。

悪魔の恐れるものは何か。

真実の愛。清き涙。

正義の叫び。

汗の生活。

信仰に生きる私。

敬虔な懺悔。

一切真実と名のつき、愛と呼ばれることがらは、悪魔を走らす天兵である。

有難がれ。ちよつと注意して何でもいいから、ちがった心でながめてごらん。何と
いう有難い人生だろう。人の情ありがたや。

たった一人だ。たった一人だ。私一人の淋しい淋しい人間としての運命だった。
独生独死独去独来。たった一人の衆生だった。けれど真実の智慧は私に教えた。

たった一人ならこそ、たった一人の私の運命ならこそ、つきせぬ業縁のつながる地
上の兄弟がなつかしかつたのだ。たった一人だと泣かない者に、どうして人がなつか
しかろう。

おゝ地上一切の兄弟よ！ 淋しいなあ。手に手をとって歩もうではないか。

ああ人の情ありがたや。気をつけて行こう。悪魔がつけば懐しい兄弟も敵に見え
る。

生きることのうれしき有難さ。

でも苦なればこそ、苦の中にこそほんとのありがたさが湧く。

苦から楽へではない。

苦へ苦へである。

苦へ苦へと進んで行け。

生きることの有難さ。生きればこそ知られもする苦と感謝。

何という私の愛されかたであろう。村の方の何という親切でしょう。まだ名も知
らぬお家から、わざわざ私にとお花を下さる。心からの清い贈り物、一つ一つみ親に
お礼を申す私は、深い感謝に涙ぐむ。運動場の隅には畑が出来て、菊がさされる。

あの教室では明日の授業の仕度が見える。日に日に実地授業の成績があがる。新
しい研究が試みられる。新しい計数器が作られる。校内には新しい光明が、輝く希望
が、みなぎっている。そうした空気の中に生きる私のほんとの幸福。これも昨年、村
民三千皆総掛かりで大きな悪魔を追い出したためか。

「悪魔は外に福は内に」

と豆をまいたとて悪魔は出ない。

内省。内省。心の中を光にかけて、つきつめるまで照らして見る。悪魔の正体見とどけたら、案外弱い悪魔の性分。

悪魔の足をとって倒に振へば、全ての御恩を忘れた心。有難いと一言も言わなかった彼岸不遜の高慢心。わしが賢いと他人を見下した天狗の性、あつても余つても、これでよいと足るを知らなかった食欲の心。狂うがままに、燃えあがる瞋恚の炎。それこそは悪魔の正体。

大地の上に手をついて、額の汗を地にそそぎ、まなじりあげて無限のかなたに光明みとめる者に、手をたかくあげて、声をはりあげて、夢見る同胞に覚めよとさげぶ者に、悪魔のついた弱ききづつける同胞を、涙と血をもって負うてゆく者に、悪魔のつく余裕があるうか。

大地の上に立って、そうして、右手をあげてあの光を指させ。そしてゆつくり歩み出せ。一秒もとどまらぬように。